



PSU物語



悶茶流

プロローグ

——プロローグ——

グラール太陽系に存在する惑星、ニューデイズ。

そこに住むニューマンと呼ばれる種族の中に、時折不思議な力を目覚めさせる者がいた。

ある者は触れただけで相手の心を読み取り、ある者は念じるだけで巨大な岩をも打ち砕いた。

そして、数千万人に一人の確率で生まれるとされる幻視の力を持つ少女達。

国家を統一するグラール教団は、各地からこのような力を持つ子供たちを密かに集め、

いずれ始まるであろう民族闘争へ向け、さらなる能力開発を進めていた。

それは紛れもなく人間兵器の製造だった。

この物語は、力により自らの運命を知ってしまった少女と、

彼女が全てを掛けて思いを伝えた男との、真実の物語である。

青の手紙

お母さん、元気になっていますか？ わたしはとても元気です。

ときどきお母さんのことを思い出してさみしくなったりするけど、そんなときは教育係のレイラさんが、

さみしくなったらいつでもわたしのことをお母さんと思って、甘えていいのよって言ってくれます。

でもレイラさんとお母さんはぜんぜんちがいます。だってレイラさんはすごく太ってるんだもの。

いそがしいときはおっきな体をぶんぶんゆらして、ドタドタ音を立てながらろうかを走っています。

おもしろくて大好き。

もしもお許しがもらえたら、こんどお母さんにレイラさんの写真を送りたいと思います。

そういえば最近、あたらしいお友達ができました。

わたしたちは週に2回、オウトク・シティへ社会見学に行って、

そのあと昇空でんの支天閣でお祈りをするんだけど、

そのときにビーストの男の子がいてね、たまたまお話をしたの。

支店閣の急なかいだんを駆け上がるのが好きで、よく遊びにきてるみたい。

ちょっとかわってるけど、すごく元気で、いつもたのしそうに笑っている男の子です。

わたしは近ごろ、この男の子と会うのがたのしみになっています。

お母さんにも合わせてあげたい。いつかできるかな？

うん、きっとできるよね。

じゃあ、また手紙かくね。

おやすみなさい。

+++++

お母さん、今日はとてもつらかったです。

神様はどうしてわたし達にこんな力を授けたの？

わたしが初めて見た幻視は、幸せそうに微笑む一組の家族の姿でした。

夢と現実の狭間で見た光景がある日突然目の前に現れたとき、わたしは運命の存在を知り、心から嬉しいと思いました。まだ幼かったわたしは、誰もが幸せに暮らす未来しか知らなかったのです。

お母さん、覚えていますか？ わたしが声を弾ませて「夢で見たのと同じ！」って叫んだ日のことを。

あの時のお母さんは、なぜか少し悲しそうな顔をしているように見えました。
今思えば、お母さんはその後わたしが辿る運命の片鱗を、少しだけ悟ってしまったのかもしれませんが。

わたし達は常に言い聞かされています。
わたし達に与えられた何不自由ない生活は、
このニューデイズに生きる多くの民の支えにより成り立っているのだと。
わたし達は彼らの希望であり、わたし達的能力をさらに高めることで得られる糧は、
このニューデイズに更なる繁栄をもたらし、理想的な国家を作り上げるために必要不可欠な人材
、
象徴であるということ。

お母さん、お母さんは.....
もしもわたしが幻視の巫女に選ばれたら、幸せですか？

+++++

その後、変わりはないですか。
昨日、これまで一緒に訓練を続けてきたミルという子が、
ついに精神の限界をきたし、教団本部から去って行きました。
幻視の力が強まれば強まるほど、わたし達はさまざまな物を見なければならなくなりました。
惑星間で繰り広げられる多くの紛争や、シードによる侵食と侵略、毎日毎日、数え切れないくらい
の死を体験します。
愛する人を失い、心を引き裂かれるほどの悲しみを抱えた彼らを、わたし達に救うことなど出来る
のでしょうか。

お母さん、いつか話したビーストの少年のことを覚えていますか。
週に2度、たった数時間だけ一緒に過ごすことが出来る彼との時間だけが、今のわたしの心の支
えです。
幼かったあの頃から、彼と居るときだけは自分の置かれた状況も、背負った運命も、全てを忘れ
ることができました。
もし彼が居なければ、わたしもきっとミルのように心を病み、お母さんのもとへ帰ることが出来
たのかもしれませんが。
でも、それはわたしにとって幸せなことなのでしょうか。

わたしは彼にも手紙を書くようになりました。

彼の住む惑星モトゥブで使われる文字は、簡略化された記号のような形をしていて、覚えるのがとても楽しいです。

彼のほうはニューデイズ文字をあまり上手く書けないらしく、フォトンの電子メールや写真をよく送ってくれるのですが、

ときどき写真に写っている彼の友達を見て、わたしは少しやきもちを焼いてしまいます。

だって、限られた時間の中でしか会うことが許されないわたしと違って、彼らはいつだって彼と一緒に居られるんだもの。

お母さん、あと数年で、わたし達の中から幻視の巫女が誕生します。

誰が選ばれるのか、まだその未来を予知することはできていません。

お母さん、今日はとてもあなたに会いたかった。

お体に気をつけて。

おやすみなさい。

+++++

お母さん。お母さん。お母さん。

今、何度も声に出してあなたを呼んでいます。

わたしはあと何回、こうしてあなたに手紙を出すことができるのでしょうか。

これからわたしが書くことは、教団内部でも極一部の限られた人しか知りえない極秘事項です。

わたしはこの手紙を彼に託し、お母さんの元へ届けてもらおうと思っています。

今日、ついに幻視により次の巫女が決定したのです。

それはミレイという名の少女でした。

青い髪と澄んだ瞳を持つ、とても美しい少女です。

大らかで優しい心を持ったミレイなら、このニューデイズの巫女として相応しいでしょう。

しかし、わたし達は巫女の決定と同時に、残されたわたし達の運命も見てしまったのです。

数週間後、わたし達は惑星パルムのある場所へ戦闘補佐という形で送られます。

この戦いは、わたし達の力を使わなければ決して勝つことが出来ないのです。

お母さん.....涙を止めることができません。

わたしはいったい、何の為にこの世界に生まれたのでしょうか。

教団は幼かったわたしをお母さんから引き離し、十年以上もこの国の為に幻視を行わせました。

それなのに、わたしの命はこんなふうに最後を迎えなければならないのですか。

わたしはパルムの戦闘で、敵の攻撃により命を失います。

お母さん、怖いよ.....。

お願い、助けて.....。

悪夢のような幻視から目覚めたとき、わたしの手を握るニーナの姿がありました。

ニーナは大きくて美しい瞳を涙で潤ませながら、「わたし達は最後まで一緒だよ」と呟き、頬にキスをしてくれました。

六歳で教団に引き取られたわたしとニーナは、十二年間、まるで姉妹のように育てられました。おてんばでお姉さん気質のニーナは、母を恋しがっていじけるわたしをいつも気遣ってくれ、そんなニーナのことを、わたしも実の姉のように慕いました。

わたし達の幻視は時折共鳴し、二人で見る未来の予知は、一人で見る予知より遥かに鮮明で的確でした。

そしてたった今、わたしとニーナは幻視の巫女がミレイであることを知るのと同時に、自らの死を予知したのです。

恐怖に震えるわたしの体をニーナが抱きしめた瞬間、彼女の瞳から溢れた涙がわたしの頬を伝って流れ落ちました。

「手紙、書かなきゃね……。みんな待ってるよ」

嗚咽を抑えたニーナの声が、地下施設の静かな室内に木霊しました。

わたしもニーナもパルムの戦闘で死ぬ。

一度溢れ出した涙は、どんなに拭い続けても止まることはありませんでした。

幻視の力は実感を伴った恐怖とともに、確実に訪れるその日を告げていたのです。

泣き崩れるわたしの肩を抱いてくれたニーナと部屋を出ると、

教団の星霊主長であるルツ様が言いました。

「全ては民のためだ」

ニーナは赤く腫らした目でルツ様を睨み付けると、

「それがこれまで散々幻視を行ってきたわたし達に対する最後の言葉ですか」と吐き捨てるように言いました。

別の部屋に居たミレイたちは、どんな気持ちで目を覚ましたのでしょうか。

幼い頃から共に訓練を積み、姉妹のように過ごしてきたミレイはやがて巫女になる。

そして、その数週間後、わたしとニーナはパルムへ向かい、命を落とすのです。

+++++

自室へ戻ったわたしは、混乱したまま震える手で母に手紙を書きました。

こぼれた涙が文字を滲ませ、何度も声に出して母を呼びました。

六歳で家を離れて以来、一度も母に会うことはなかった。

それでも霞がかった記憶の中の母は、いつも優しく微笑んでくれました。

返事のこない手紙を書き続けるのは寂しくもあったけど、大きな支えでもあったのです。

わたしは今書き終えたこの手紙を彼に託そうと思います。

彼ならきっと、この手紙をお母さんに届けてくれる。

そう信じています。

その晩、わたしは眠ることが出来ませんでした。

目を閉じると死の瞬間が何度も瞼に蘇り、悲鳴を上げて飛び起きてしまうのです。

夜が明け始めた頃、ニーナが部屋にやってきて、わたしの手を握ってお祈りを始めました。

星霊の名のもとに幻視を行ってきたわたし達に、神は死を与えようとしている。

それなのに、ニーナは何故お祈りなんかするの。救いなどありはしないのに。

わたしはまた溢れ出してくる涙を止められず、ニーナに抱きついて声を上げて泣きました。

+++++

それから数日後。

教団の研究者とともに地下施設へ向かったわたしとニーナは、最後の幻視を終えました。

パルム戦に必要な武器、シールドラインの選別、戦闘員の必要人数、

陣営を作るのに最も適した場所などを幻視により定め、彼らに伝えたのです。

あとはわたし達が直接戦場へ同行すれば、この作戦は必ず成功し、勝利を収めるのです。

わたしとニーナはオウトク・シティへ出ると、与えられた多額のメセタでさまざまな洋服を買い

、
食べたいものを食べ、日が暮れるまで好きなことをして過ごしました。

決められた日以外に外出するのは初めてで、

見慣れたはずのオウトク・シティがまるで別世界のように華やいで見えました。

たとえそれが一時の儚いものだとしても、これほど自由を満喫できたのは母の元を離れて以来初めてだったかもしれません。

わたし達は昇空殿の支天閣へ向かうと、真っ赤に染まる夕日を眺めながらたくさんの思い出を語り合いました。

泣き虫だったわたしをいつもニーナが守ってくれたこと。教育係のレイラさんがドタドタと廊下を走る姿。

各地から連れられた能力を持つ子供たちに、施設での過ごし方を教えるのはミレイが一番上手だったこと。

施設の研究員みんなが、わたし達にとっても親切に接してくれたこと。

数え切れないくらいたくさんの思い出が蘇りました。

中でもニーナは、やはりわたしにとって最も特別な存在でした。

強いショックを伴う幻視を見なければならなくなって以来、

わたしとニーナはお互いが唯一の家族であるかのように、差さえ合って生きてきたのです。

家族を失ったわたし達にとって、それは本物の家族以上の絆であったと断言できます。

夕日が沈み始めると、わたしはふと彼に会いたくなりました。

種族の違いはあるけれど、彼もまた、幼い頃から共に成長してきた大切な仲間でした。

彼と知り合ってもない頃、支天閣の階段をどちらが先に登りきるか、という勝負をしたことがありました。

階段に背を向けて、「3、2、1、ゼロ！」という掛け声でスタートするはずだったのに、

彼はゼロを言う直前に走り始め、わたしに大きく差を開いてゴールしたのです。

意地悪をされて不機嫌になったわたしに、彼はガッツポーズをしながら「勝ったー！」と叫びました。

わたしは悔しくて、彼を馬鹿にするためにあっかんべーをしてやりました。

それなのに、彼もお尻をペンペンと叩いてわたしを挑発してきたのです。

お互いの動作がまったく同時に重なったことが変におかしくて、わたし達は声を上げて笑いました。

あれからたくさんの時間を彼と過ごしたけど、わたしはこの階段での勝負を忘れたことはありませんでした。

いつか彼に仕返ししてやろう、じゃあ、どうやって仕返ししようか、と考えるたびに、わくわくして楽しい気分になったのです。

それから数年の月日が流れ、ようやくわたしは彼に仕返しことができました。

夏のある日、わたしと彼はパルムのパラカバナ海岸へ出かけました。

白い砂浜が印象的な、とても美しい海岸でした。

先に水着に着替えた彼は、エメラルドグリーンに輝く海を眺めながらわたしの着替えを待っていました。

すぐに水着に着替えたわたしは、彼の背後にそっと忍び寄り、背中にキスをしたのです。

まるで喜劇役者のようなオーバーな仕草で驚いた彼は、振り向いてわたしに言いました。

「俺の背後を取るなんて命知らずだな！」

どう見ても冗談ではなく本気でそう言っている彼の姿は涙が出るほどおかしくて、

結局わたしは、これがあの時の仕返しだということを伝えることが出来ませんでした。

わたし達は本当に素晴らしい日々を共に過ごすことが出来たと思います。

いくつもの思い出が昨日のことのようによろこびに浮かび、
彼に会いたい、無性にそう思いました。

「ねえ、ニーナ……もう一度わたしと……幻視をしてくれない？」

夕日に赤く染まったニーナの顔に、悲しい笑みが浮かびました。

「何のために？」

「わたし達が……こうして生きてきた証を残すために」

+++++

深い深い意識の底。

幻視の海が広がっている。

わたしはそこで見たのです。

悲しみに打ちひしがれ、ファルス・メモリアルで祈りを捧げる彼の姿を。

白い夢

彼女から突然電子メールが届いた。
手書きの手紙が好きな彼女にしては珍しい。
中を開くとそこにはたった二行、

明日ニューデイズに来れる？
話したいことがあるの。その前に2人でデートもしたいな。

それだけ書かれていた。
彼女がデートという言葉を使ったことに俺は少し驚く。
ニューデイズで初めて彼女を見たあの日から、俺はずっと彼女のことが好きだった。
素直に好きだと伝えられない馬鹿な俺は、会うたびに彼女にいたづらを考えて、ときどき本気で怒らせたりもした。
一番最初のいたづらは、支天閣の階段を駆け上がる競争をしたときだった。
3、2、1、ゼロのカウントが終わる前にわざとスタートした俺は、大差をつけて彼女に勝った。
。両手を腰にあて、

「ふんっ！ ひきょうもの！」

そう言ってヘソを曲げた彼女。
怒った顔も、おどけて笑う姿も、転んで泣いて、涙を拭うちょっとした仕草まで、何もかもが愛しかった。
あれから何年時が過ぎても、俺の気持ちは変わらなかった。
それどころか、彼女のへの想いはどんどん強くなるばかりだ。
彼女が俺のことをどう思っているのかはわからない。
今まで二人きりで会うことがあっても、それをデートと呼んだことは一度もなかったからだ。
だけど、彼女は突然よこしたメールに明日デートがしたいと書いてきた。
もしかすると、彼女も俺のことを特別な目で見ようとしてるのかもしれない。
期待に胸が膨らむ。

+++++

翌日、俺は彼女に会うためにニューデイズへ向かった。
待ち合わせに場所に現れた彼女は、心なしか少し痩せたように見えた。

彼女は今晚オウトク・シティで開かれる始祖祭を見たいというので、俺達は夜になるまで街を観光することにした。

観光と言っても、見慣れた街で出来ることは限られてるし、特別見るようなものもなかった。それなのに彼女は、いつになく嬉しそうに俺の手を取ると、街中の店を片っ端から梯子してまわった。

何を買うわけでもなく、ショーケースに飾られたアクセサリーを見ては、どれが好きか俺に尋ねたり、

服屋でありったけの服を試着したあと、幸せそうに微笑みながら、色んな服を着たわたしの姿を目に焼き付けて、

と、よくわからないことを言った。

夜が近づくにつれ、彼女の表情がどこか沈んだように暗くなっていくのがわかった。

歩き回って疲れたのかな、そう思った俺は、ベンチに座ってしばらく休もうと提案した。

屋根つきのベンチの下に腰を下ろすと、彼女は俯いたまま黙ってしまった。

どうした？ そう訊いた俺に、顔を上げた彼女は悲しそうな微笑みを返した。

「ねえ……何も言わずに聞いてくれる？」

「ん、なんだ？」

+++++

朝日が昇り始めていました。

彼がモトゥブへ帰ったあと、わたしは母へ宛てた最後の手紙を持って支天閣へ向かいました。

日の光は街全体を徐々に照らし始め、少し冷たい風が髪をいたずらに躍らせると、微かな蓮の香りがしました。

いつもと変わらない日の出を眺めていると、まるでこれから起こることのすべてが夢なんじゃないかと思えるほど、

穏やかで落ち着いた気持ちになります。

わたしは母へ宛てた手紙を小さくなるまで破ると、それを空へ向けて放ちました。

紙の破片は光を反射してキラキラ輝きながら風に運ばれ、やがて見えなくなって消えてゆきました。

お母さん、わたしを生んでくれてありがとう。

あれから一度も会えなくてごめんなさい。

この想いは時を越えて、いつか必ずあなたに届くと信じています。

わたしは彼との最初の思い出を宿した支天閣の階段に腰掛け、
彼に向けて最後の手紙を綴ることにしました。

言葉でどこまで伝えられるかわからない。

でも、それでもいい。

わたしは精一杯の想いを彼へ向けて綴りました。

そして手紙を書き終えたちょうどその時、戦闘服に身を包んだニーナがやってきました。

美しく気高いニーナの姿が、朝日に照らされてとても眩しく見えました。

ニーナは優しく微笑みながらわたしを抱きしめ、

「彼にちゃんと話せた？」

「うん」

「そう、よかった」

わたしを真っ直ぐに見つめるニーナの瞳が、
深く静かな色を湛えていました。

「ニーナ……わたし達——」

「ずっと一緒だよ」

「うん、ずっと一緒」

澄み切った青空に大きな太陽が掲げられ、
わたし達に出発の時を告げていました。

+++++

親愛なる君へ。

こうして手紙を書くのは久しぶりだね。

君は今、何をしていますか？

いつもみたいに元気に笑ってるといいな。

この手紙が君の元へ届く頃、わたしはもうこの世界に居ないと思う。

だけど、そんなに悲しまないで。

わたしは今、とても穏やかな気持ちでこの手紙を書いています。

思い出を懐かしんだり、未来の君を想像してみたり、わたしに残された少しの時間は、たくさんの人達への感謝で溢れています。

ねえ、最後の夜に二人で話したことを覚える？

もしも君が、どうしようもない不安にくじけそうなときは、思い出して。

わたし達がこの世に生を受けた意味を。

生きてゆくことの真実を。

君を支えてくれたみんなのことを。

これから出会う人達の待つ未来を。

君なら大丈夫。

ある日わたしは、自分の死を予知しました。

誰にも言えず、抗うことすら許されない運命を知ったとき、本当はとても怖かった。

だけどそれは、この意識を得るための必然であり、君とわたしが紡いだ絆の証だということが、今ならばはっきりとわかります。

わたし達の進む道がたとえ離ればなれになっても、きっとまためぐり逢えるから、絆が織り成す命の連鎖を忘れないで。

訪れる喜びも、悲しみも、ひとつの通過点にすぎないのだから。

伝えたいことはまだたくさんあるけど、これで最後にしようと思います。

ありがとう。

わたしの人生はとても幸せでした。

本当にありがとう。

何度言っても足りないくらいだよ。

またいつの日か、一緒に冒険しようね。

彼女が世界から姿を消した数週間後、一通の手紙が届いた。
宛名も差出人も書かれていない真っ白な封筒を見た瞬間、何故か不思議と、
それが彼女から届けられた手紙だとわかった。
俺は夢でも見てるような感覚にとらわれながら封を開き、中から手紙を取り出す。
所々滲んだ美しい書体のモトウブ文字は、間違いなく彼女のものだった。
とても短いその手紙を、俺は何度も読み返した。
何度も何度も読み返し、ようやく封に戻すと、
ファルス・メモリアへ向かうための準備を始めた。

+++++

彼女の死を知らされたのは、俺と彼女が最後に会った日の翌日だった。
教団の使者を名乗る連中が数人やってきて、無機質に彼女の殉職を知らせると、
原因すら説明しないままに去っていった。
俺は彼女の死を信じることができず、何度も教団本部へ出向いて彼女の行方を尋ねた。
しかし、奴らは彼女の死が記された紙切れを事務的に掲示するだけで、
彼女の魂がファルス・メモリアに祀られているということ以外、何一つ死の真相は教えてくれ
なかった。
それからの俺は、届くはずのない手紙を待ち続け、日の流れを忘れるような生活を続けた。
昼も夜も関係なく、ただ彼女のことだけを想い、ファルス・メモリアで祈りを捧げ続けた。

彼女と過ごした最後の夜。
始祖祭の盛大な花火と演舞を見終えた俺達は、森を抜けた先にある静かな場所で打ち上げ花火を
することにした。
すっかり元気を失くしてしまった彼女に、どうにかして笑顔を見せて欲しかったからだ。
花火をセットし、着火する。バチバチと音を立てて燃える導火線。
俺はあの時と同じようにカウントダウンを始めた。

「3、2、1—」

ゼロ。そう言おうとした瞬間、突然彼女が俺に抱きついた。
それと同時に花火が打ちあがり、白銀の火花が夜空で弾けた。

「どうした？」

彼女は何も答えない。

俺の体にきつく腕を回し、顔を俯けたまま体を震わせている。

どうしていいかわからなかった俺は、ただ彼女の頭を優しく撫でて抱きしめた。

そして微かな嗚咽を聞いたとき、はじめて彼女が泣いてることに気づく。

「悲しいのか？ どうして泣いてる？」

彼女が顔をあげると、月明かりに輝く美しい瞳から大粒の涙がぽろぽろと零れ落ちた。

俺は彼女の頬にそっと手を添えて、その涙を拭う。

彼女は俺の手に自分の手を重ね、

「ずっと……君のことが好きでした」

震える声でそう言った。

重ねられた手にいくつもの涙が伝う。

俺は言葉を返す代わりに、彼女にキスをした。

触れ合う唇から伝わる優しい温り。

「俺もあの日、初めて会った日から、ずっと君が好きだった」

俺はその時、何年も言えずにいた言葉をようやく伝えることができた。

胸の奥で石のように硬くなっていた何かが、ずっと溶ける。

もう何も隠す必要はない。素直になっていいんだ。

俺は彼女をもう一度抱きしめた。

「ありがとう」

どんな顔をして彼女がそう言ったのか、俺にはわからない。

ただわかっているのは、それが彼女の最後の言葉だということだけだった。

+++++

ファルス・メモリアに着いた俺は、慰霊碑に眠る彼女に向かって語りかける。
いつ終わるとも知れない思い出話を聞かせながら、溢れる涙を拭うのさえ忘れ。

不意に、居るはずのない彼女の姿を背後に感じて振り返った。
もちろんそこには誰の姿もない。

気づくと俺は駆け出していた。
やっとわかった。やっとわかったんだ。
君の伝えたかった想いの全てが。

運命

「ねえ……何も言わずに聞いてくれる？」

「ん、なんだ？」

「君の生きる明日が、今日と違う世界に見えても、——思い出して、君なら大丈夫」

「はっ？ なんだそれ」

「ううん、何でもない。ってというか、何も言わずに聞いてって言ったでしょ！」

「ははっ、わりい！」

「あのね、君は運命って信じる？」

「運命かー、別にないとは思わないけど、気にしたことねえかな」

「じゃあ人ってさ、死んだらどうなると思う？」

「どうなるって、そりゃあ……う～ん、わかんねえよそんなの！
どうしたんだよ、急にそんな小難しい話」

「ちょっとね、たまにはこんな話もいいかなーって思って。もうひとついい？」

「おう」

「今度はちゃんと聞いてよね！」

「はいはい、わかりました。何でしょうかお嬢様」

「もう！」

「ははっ、冗談だよ。ちゃんと聞く」

「もうすぐニューデイズに新しい幻視の巫女が誕生するの、知ってる？」

「ああ、結構でかいニュースになってるしな」

「その巫女様が持ってる幻視の力は、何も彼女だけが持つ特別な力じゃないの」

「えっ、そうなのか？」

「うん。わたし達ニューマンの中には、ときどきそういった不思議な力を持って生まれる人がいてね、この話は巫女様と同じ幻視の力を持つ人から聞いた話なんだけど、わたし達が生きるこの世界はね、運命という大きな命の流れと、それを取り巻く絆の糸によって、全てが必然を織り成して巡っているの」

「な、何だそれ……意味わかんねえぞ」

「うーん、簡単に言うと、この世界に誰かが生まれることも、亡くなってしまうことも、全ては運命によって定められていることなの。そして、わたし達が生きていく中で誰と出会い、どんな人生を歩むかも、あらかじめ全てが定められていて、決して変えることはできない」

「はっ!? なんだよそれ！ それじゃ——」

「お願い、もう少しだけ聞いて」

「あ、ああ、ごめん」

「わたしと君が出会うことも、ずっと前から決まっていたんだよ。そして、いつかみんな離ればなれになるように、誰にも必ず別れの時が来る。だけどそれは、嘆き悲しむようなことじゃなくて、命を繋ぐための大切な絆なの」

「命を繋ぐ……絆？」

「うん。わたし達の命は何度も繰り返す、何度もめぐり逢うの。そのつど姿を変えて。君とわたしも、次の人生では親子かもしれないし、兄弟かもしれない。お婆ちゃんと孫かもしれないし、席が隣同士の同級生かもしれない。敵と味方にわかれるかもしれないし、喧嘩だっていっぱいするかもしれない。でもね……それでもまた、必ずめぐり逢える」

「何だか浪漫がある話だな」

「そう、とてもロマンチック。
遠い昔、そして、ずっと先の未来。
どんな世界に生れ落ちても、わたし達はいつだって一緒だよ」

だから君も信じて、君自身の運命を。

君なら大丈夫。

— 完 —